



## チュルク語南西グループの構造と記述

栗林, 裕

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2010-02-17

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙3093

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003093>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 栗林 裕  
博士の専攻分野の名称 博士（文学）  
学 位 記 番 号 博ろ第 3093 号  
学位授与の 要 件 学位規則第 5 条第 2 項該当  
学位授与の 日 付 平成 22 年 2 月 17 日

【 学位論文題目 】

チュルク語南西グループの構造と記述

審 査 委 員

主 査 教 授 西光 義弘  
教 授 松本 曜  
教 授 岸本 秀樹

東京大学大学院人文社会系研究科教授 林 徹

人間文化研究機構国立国語研究所准教授 Prashant Pardeshi

氏名 栗林 裕

論文題目 チュルク語南西グループの構造と記述

本書はチュルク語南西グループに見られる特定の文法構造について、概観し、理論的な諸問題を検討し、このグループに分類される今まで十分に記述されていない諸言語の構造記述を試みたものである。本書は二部より構成されている。第一部はチュルク語南西グループで最大の話者数を持つトルコ語の複合語を中心とする文法の記述と複合動詞および文法カテゴリーの態を巡る諸問題についての検討である。第二部はチュルク語南西グループに属する諸言語、主にアゼルバイジャン語、バルカン・トルコ語、ガガウズ語およびカシュカイ語等の統語現象の記述を中心に、特に、接触による言語変容の諸問題について検討する。本書は以下のような章立てで、目次等9頁及び本文256頁から構成されている。

はじめに

目次

第一部 トルコ語の構造

第一章 文法の概要

第二章 語形成

第三章 複合名詞

第四章 複合動詞の分類

第五章 非語彙的な複合

第六章 トルコ語の補語編入と主語から目的語への繰り上げ

第七章 主語編入についての心理言語学的分析

第八章 複合動詞の文法化

第九章 自動詞と他動詞

第十章 使役と意味的曖昧性

第十一章 結論

第二部 チュルク語南西グループの記述

第一章 言語と言語の接触

第二章 ガガウズ語とトルコ語の語順

第三章 アゼルバイジャン語、バルカン・トルコ語、ブルガリアン・ガガウズ語の語順

第四章 カシュカイ語のコピー統語法の特徴

第五章 チュルク語南西グループの統語法と言語接触理論

第六章 結論

略記号

例文引用テキスト資料と略記号

参考文献

初出対照表

第一部では、まず第一章でトルコ語の文法の略述を行い、第二章でトルコ語の「語」に見られる一般の特徴を確認し、第三章で複合語の全体像を概観した後、第四章では複合動詞の代表的な先行研究に見られる記述を検討した。第一章から第四章までは主にトルコ語文法の語形成および形態法についての概観であり、第五章以降の複合動詞の分析に入る前の導入に相当する。

第五章以降で一貫している本研究の視座とは、トルコ語を検討する際に日本語学で蓄積された対照研究の理論的方法論をトルコ語に適用し、特に英語との対照で検討されてきた概念等がどれだけ有効であるかを検証するという点にある。筆者はトルコ語の目的語編入をはじめとする名詞編入が統語的な語形成として広く共通する性質を持つことを既に指摘したが(cf. Kuribayashi 1990a)、第五章では日本語のスルヤナルに相当する外来語由来の複合動詞が非語彙的な語形成であることを論じた。さらに、第六章では統語的な語形成は、主語や目的語などの名詞だけでなく補部として捉えられる名詞類や述語にも拡張されることを論じた。今までのトルコ語文法研究の中でトルコ語の編入とされるものは、統語的あるいは意味的な基準で認定されたものであり、その生産的な面は検討されることなく、編入であるかどうかの認定も直感的なものである感が否めなかった。このような状況の下、第七章は心理言語学的な観点からトルコ語の編入現象の解明に貢献するものである。目的語の編入と共に、主語の編入が生じていることを経験的な証拠をもって提示することを試みた。編入とはいわゆる抱合的言語に見られる文法現象を拡大解釈することにより、トルコ語の当該現象に適用したものである。抱合的言語で見られる編入現象とトルコ語で想定されている編入とを比較すると細部において異なる面を持つのは事実である。語形成のさまざまな現象を解明するためには、個別言語に特有な条件を解明していく必要がある。第五章から第七章まででは「編入」という概念を導入することにより、トルコ語に見られるいくつかの現象を統一的に説明した。

第八章では、動詞と動詞の複合のあり方について考察を行い、トルコ語の述語に関する複合について第四章からの議論と併せて網羅的に検討した。トルコ語の複合動詞は日本語と比較して種類が少なく、日本語の複合動詞の議論の多くがそのままの形では適用できない。しかし、複合動詞の種類が少ないことは現代トルコ語に特有の問題であり、チュルク諸語全体で見るとむしろ、現代トルコ語は例外的な状況にある。

第九章では、トルコ語の言語表現のあり方と他動性の問題を検討した。日本語と英語の対照研究では1980年代以降よりスルとナルの対立をさまざまな文法現象との相関に求めようとする試み

が始まった。トルコ語にも日本語と同じように補助動詞を用いることによるスルの表現とナル的表現の対立が見られるが、日本語には見られない主語と述語の文法的一致があることにより、日本語と英語の対照研究で見られるスルとナルの二分法は容易に適用することができないというのが本章での結論になる。このように従来のトルコ語文法研究ではなされることがなかった、言語表現からの新しい視点よりトルコ語の分析を行った。

最後に第十章では、態の現象の中で特に使役態について、トルコ語だけでなくチュルク諸語も視野に入れて、なぜ使役形が受身の意味を持つのかということ類型論的な観点から考察した。そこで得た結論は、トルコ語だけを検討することからは全体像の一部しか捉えることができないということである。そこから、筆者の関心はトルコ語のみによる研究を越え、同系のチュルク諸語の研究という、さらに広い観点へと向かい、それは本書第二部のチュルク語南西グループの記述的研究に繋がる。

第二部では現地調査により得られた言語資料を用いてチュルク語南西グループの諸言語に見られる接触による言語変容について、まず全体的なまとめを行い、言語接触の理論的モデルであるコード・コピーモデルの観点からチュルク語南西グループで見られる言語接触の側面を明らかにした。

第一章ではバルカン半島と周辺地域で見られる基本的な言語接触の事象、特に不定法の消失に焦点を当て、方法論とその問題点を議論した。第二章ではトルコ語と対比させながらガガウズ語がVO的語順を持つことを存在文の語順に注目することにより論じた。またガガウズ語のみが、他のチュルク語南西グループの諸言語には見られない二重与格構文を持つことも論じた。第三章では語順に関する考察をさらに進め、アゼルバイジャン語、バルカン・トルコ語およびブルガリアン・ガガウズ語のそれぞれの言語が、助動詞転換、二重与格、不定詞の消失、従属節表示、動詞削除の方向などの基準に関してVO的特徴を持つことを示した。第四章ではカシュカイ語の統語構造の記述に重点を置いた。同時に、近隣同系言語であるアゼルバイジャン語との比較を行い、カシュカイ語はペルシア語からの影響のもと、接触によるより著しい言語変容を受けていることを示した。さらに最新のカシュカイ語の言語資料も検討し、そこに見出される言語変容の諸特徴と今後の課題について検討した。第五章では、客観的な言語記述のために、言語接触モデルにおけるチュルク語南西グループの諸言語に見られる言語変容の位置づけを試みた。さらに、コード・コピーモデルの基本的な考え方にに基づき、アゼルバイジャン語やガガウズ語に広く見られる与格名詞後置構文について検討すると共に、チュルク語南西グループのモーダル表現についても分析を広げた。

本書第二部で考察した言語接触と社会的支配関係は、最近のコード・コピー理論で論じられるように(cf. Johanson 2006)、支配的な言語と被支配的な言語という二分法で捉えられるほど単純なものではないことが指摘できる。チュルク語南西グループの中では、カシュカイ語とガガウズ語は言語に見られる社会的な支配関係のあり方においてある種の類似性がある。両者は、社会的に支配的な言語であるペルシア語あるいはスラブ系言語にそれぞれ囲まれており、学校教育でも、民族語ではなく、まず社会的に支配的な言語を学ぶという状況がある。また逆に同様の観点から

アゼルバイジャン語やバルカン・トルコ語の状況を見ると、両言語ともそれぞれの地域社会の少数民族の中では最大の話者数を持つ点で類似している。つまりガガウズ語やカシュカイ語が支配言語に対して持つ支配関係よりも、アゼルバイジャン語やバルカン・トルコ語が支配言語に対して持つ支配関係はより緩やかである。これらは、もちろん固定的に決められるものではなく、社会的状況が変化するにつれて、この関係は変化する可能性を持つ。このように統語法の面に限っても、チュルク語南西グループに属する言語のそれぞれで言語変化のあり方は多様であるということは明らかである。また、本書で論じて来た南西グループに属するすべての言語ではVO語順を許すが、それぞれの言語によりその許容度には程度差があり、言語間の比較のためには客観的な基準が必要になる。例えば第四章や第五章で論じた焦点化テスト等はそのような基準になるものと考えられる。さらに、バルカン言語連合の共有的特徴とされる欲求動詞を未来時制で使用することや、不定法の消失などの関係節形成はチュルク語南西グループの周辺言語にも見られることを新たに指摘したが、これらの統語的な共通性はスラブ系言語やペルシア語など、それぞれの言語の偶然的影響によるものか、それとも接触による言語変化の際に生じる普遍的特徴によるものであるか、これらを解明することは今後の課題である。

本書第一部ではトルコ語の特定の言語構造に主に焦点を当て、文法論や類型論的な観点からトルコ語文法の個別的な分析だけでなく、トルコ語以外の言語を専門とする研究者とも共有することが出来る文法事項についての考察を行った。本書第二部では、チュルク語南西グループの中でガガウズ語やカシュカイ語など記述が十分に行われていない少数言語を中心に、現地に赴き収集した一次資料をもとに、その現状の記述を行った。そして、語彙のコピーと同様に、統語法のコピーもある条件のもとでは頻繁に起こり得ることを論じた。分析の対象をトルコ語の構造からさらに拡大し、チュルク語の南西グループ全体に広げることにより、周辺地域のチュルク諸語において見られる急速な言語変容が確認され、その一端を明らかにした。

### 論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	栗 林 裕
論 文 題 目	チュルク語南西グループの構造と記述

審査委員

区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	西 光 義 弘
副 査	教授	松 本 曜
副 査	教授	岸 本 秀 樹
副 査	東京大学大学院人文社会科学系研究科・教授	林 徹
副 査	人間文化研究機構 国立国語研究所・准教授	Prashant Pardeshi

2 論文審査の結果の要旨・・・別紙1のとおり

3 試験の結果の要旨・・・・・・・・別紙2のとおり

4 学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果、並びに学力の確認の結果、論文提出者は博士（文学）の学位を得る資格があることを認める。

神戸大学大学院人文学研究科

### 論文審査の結果の要旨

氏 名	栗 林 裕
論 文 題 目	チュルク語南西グループの構造と記述
要 旨	

本論文はチュルク語南西グループに見られる特定の文法構造について、概観し、理論的な諸問題を検討し、このグループに分類される今まで十分に記述されていない諸言語の構造記述を試みたものである。本書は二部より構成されている。第一部はチュルク語南西グループで最大の話者数を持つトルコ語の複合語を中心とする文法の記述と複合動詞および文法カテゴリーの態を巡る諸問題についての検討である。第二部はチュルク語南西グループに属する諸言語、主にアゼルバイジャン語、バルカン・トルコ語、ガガウズ語およびカシュカイ語等の統語現象の記述を中心に、特に、接触による言語変容の諸問題について検討している。

第一部では、まず第一章でトルコ語の文法の略述を行い、第二章でトルコ語の「語」に見られる一般の特徴を確認し、第三章で複合語の全体像を概観した後、第四章では複合動詞の代表的な先行研究に見られる記述を検討している。第一章から第四章までは主にトルコ語文法の語形成および形態法についての概観であり、第五章以降の複合動詞の分析に入る前の導入に相当する。

第五章以降での一貫した栗林氏の基本的姿勢は、トルコ語を検討する際に日本語学で蓄積された対照研究の理論的方法論をトルコ語に適用し、特に英語との対照で検討されてきた概念等がどれだけ有効であるかを検証するという点にある。栗林氏はトルコ語の目的語編入をはじめとする名詞編入が統語的な語形成として広く共通する性質を持つことを以前指摘しているが(cf. Kuribayashi 1990a)、第五章ではさらに論を進めて日本語のスルやナルに相当する外来語由来の複合動詞が非語彙的な語形成であることを論じている。また、第六章では統語的な語形成は、主語や目的語などの名詞だけでなく補部として捉えられる名詞類や述語にも拡張されることを論じている。今までのトルコ語文法研究の中でトルコ語の編入とされるものは、統語的あるいは意味的な基準で認定されたものであり、その生産的な面は検討されることなく、編入であるかどうかの認定も直感的なものである感が否めなかった。第七章は心理言語学的な観点からトルコ語の編入現象の解明を試みるというまったく新しい観点を導入したものである。目的語の編入と共に、主語の編入が生じていることを経験的な証拠をもって提示することを試みている。編入とはいわゆる抱合的言語に見られる文法現象であるが、拡大解釈することにより、トルコ語の当該現象に適用したものである。したがって抱合的言語で見られる編入現象とトルコ語で想定されている編入とを比較すると細部において異なる面を持つということもある。語形成のさまざまな現象を解明するためには、個別言語に特有な条件を解明していく必要を指摘している。第五章から第七章まででは「編入」という概念を導入することにより、トルコ語に見られるいくつかの現象を統一的に説明しようとしている。

第八章では、動詞と動詞の複合のあり方について考察を行い、トルコ語の述語に関する複合について第四章からの議論と併せて網羅的に検討している。トルコ語の複合動詞は日本語と比較して種類が少ないので、日本語の複合動詞の議論の多くがそのままの形では適用できないという指摘を行っている。

第九章は、トルコ語の言語表現のあり方と他動性の問題を検討したものである。日本語と英語の対照研究では1980年代以降よりスルとナルの対立をさまざまな文法現象との相関に求めようとする試みが始まったという背景がある。トルコ語にも日本語と同じように補助動詞を用いることによるスルの表現とナルの表現の対立が見られるが、日本語には見

主査記載 氏名・印	西 光 義 弘
--------------	---------

られない主語と述語の文法的一致があることにより、日本語と英語の対照研究で見られるスルとナルの二分法は容易に適用することができないということを本章の結論として引き出している。これは従来のトルコ語文法研究ではなされることがなかった、言語表現からの新しい視点よりトルコ語の分析である。

第十章では、態の現象の中で特に使役態について、トルコ語だけでなくチュルク諸語も視野に入れて、なぜ使役形が受身の意味を持つのかということ類型論的な観点から考察している。結論として、トルコ語だけを検討することからは全体像の一部しか捉えることができないということを得ている。そこから、栗林氏の関心はトルコ語のみによる研究を越え、同系のチュルク諸語の研究という、さらに広い観点へと向かい、それは本書第二部のチュルク語南西グループの記述的研究に繋がっている。

第二部は現地調査により得られた言語資料を用いてチュルク語南西グループの諸言語に見られる接触による言語変容について言語接触の理論的モデルであるコード・コピーモデルの観点からチュルク語南西グループで見られる言語せつしよくのいちめんをあきらかにしたものである。

第一章ではバルカン半島と周辺地域で見られる基本的な言語接触の事象、特に不定法の消失に焦点を当て、方法論とその問題点を議論している。第二章ではトルコ語と対比させながらガガウズ語がVO的語順を持つことを存在文の語順に注目することにより論じている。またガガウズ語のみが、他のチュルク語南西グループの諸言語には見られない二重与格構文を持つという注目される事実を指摘している。第三章では語順に関する考察をさらに進め、アゼルバイジャン語、バルカン・トルコ語およびブルガリアン・ガガウズ語のそれぞれの言語が、助動詞転換、二重与格、不定詞の消失、従属節表示、動詞削除の方向などの基準に関してVOの特徴を持つという議論を展開している。第四章ではカシュカイ語の統語構造の記述をおこなっている。また近隣の同系言語であるアゼルバイジャン語との比較を通して、カシュカイ語はペルシア語からのより大きな影響により、著しい言語変容を受けていることを実証的に示している。最新のカシュカイ語の言語資料も検討し、そこに見出される言語変容の諸特徴と今後の課題についても検討している。第五章では、言語接触モデルにおけるチュルク語南西グループの諸言語に見られる言語変容の位置づけを試みている。さらに、コード・コピーモデルの基本的な考え方にに基づき、アゼルバイジャン語やガガウズ語に広く見られ与格名詞後置構文について検討している。チュルク語南西グループのモーダル表現についても分析を広げている。

第二部で考察された言語接触と社会的支配関係は、最近のコード・コピー理論で論じられるように支配的な言語と被支配的な言語という二分法で捉えられるほど単純なものではないことを指摘している。カシュカイ語とガガウズ語は社会的な支配関係のあり方において支配的な言語であるペルシア語あるいはスラブ系言語にそれぞれ囲まれているという点で類似している。逆にアゼルバイジャン語やバルカン・トルコ語では地域社会の少数民族の中では最大の話者数を持つという点で類似している。統語法の面に限っても、チュルク語南西グループに属する言語のそれぞれで言語変化のあり方は多様であるということ明らかにしている。また、南西グループに属するすべての言語ではVO語順を許すが、それぞれの言語によりその許容度には程度差があり、言語間の比較のためには客観的な基準が必要になるという問題点も指摘している。

本論文は意欲的に理論言語学の成果をチュルク語の分析に適用したものであるが、完成されたモデルとしての提示までには至っていないという点で、今後さらに研究を進めることによって完成されたモデルへと近づくことが期待される。従来個別言語の研究においては理論的意義よりも言語事実の記述が重視される傾向があったが、言語事実の記述から理論的考察へと進めているという点で、一般言語学への貢献となる研究といえる。また第二部では従来記述が不十分であったガガウズ語およびカシュカイ語の現地調査にもとづいて言語接触理論に対する意味を考察したものであるが、調査がまだまだ十分行き届かないこともあり、仮説的な結論となっている。今後さらに現地調査を重ねることによって仮説の実証が行われるという期待が持てる分析である。

以上に鑑み、本審査委員会は、論文提出者栗林 裕氏が博士（文学）の学位を授与されるに足る資質を有すると判断した。